ポーのグロテスク——「エピマネス／四獣一体」と旧約「エゼキエル書」の関係

並　木　信　明*

「エピマネス／四獣一体」（“Epimanes/Four Beasts in One,” 1836）は，エドガー・アラン・ポーが詩から短篇小説に創作の軸を移し始めた頃に創作された最初期の短篇の一つで，構想のまま終わった短篇集『フォリオ・クラブ』（“The Tales of the Folio Club”）を代表する作品でもある[1)]。人物も設定も架空で抽象的なポーにしては珍しく，この作品はセレウコス朝シリアの王アンティオコス４世（Antiochus IV，在位前175～前164）という歴史的人物を主人公にしている。執筆に当たってポーは，旧約聖書の「エゼキエル書」や外典「マカバイ記」，フラウィウス・ヨセフス（Flavius Josephus，c. 37–c. 100）の『ユダヤ古代誌』（*Antiquitates Judaicae*），ヘロドトス（Herodotus，前484頃–前425頃）の『歴史』（*Historiae*）などを通読して，歴史的背景や人物像造形の着想を得たと考えられる。過去の歴史的人物といえば，執筆当時，ポーはすでに最初の長詩「タマレーン」（“Tamerlane,” 1827）でティムール朝のティムール（Timur，1336–1405）を扱っている。だが，そこで歌われているのは敵を震撼させた恐怖の征服王の武勇伝ではなく，初恋の娘を思うロマンティックな魂の秘めた情熱であった。一方「エピマネス／四獣一体」が目指しているは残虐な王の，奇想に満ちた怪異な演出と市民の熱狂によるグロテスクな美的表現であり，ポーが詩のロマンティシズムと決別し，散文というジャンルで恐怖・グロテスク・美の三位一体を追求しようとした画期的な短篇作品となっている。

＊専修大学文学部教授

ここで重要なのは旧約聖書を新約聖書の予兆と見なすキリスト教のタイポロジー的な解釈ではなく，ユダヤ教徒のようにそれ自体で意議あるものと見なし，むしろ一般の歴史書として自由に読もうとする視角であり，ポーの非ピューリタン的精神の闊達さなのである。

「四獣一体」は，最初の題は「エピマネス」（“Epimanes”）であった。これはアンティオコス４世が自ら「顕現神」（Epiphanes）と称したことから，それをもじって“Epimanes”「狂人」と呼ばれたことに由来する呼称である。この作品が，最初1836年『サザン・リテラリー・メッセンジャー』（*Southern Literary Messenger*）誌３月号に掲載されたときと，1840年に短篇集『グロテスクとアラベスクの物語』（*Tales of the Grotesque and Arabesque*）に収録されたときの題は「エピマネス」であったが，1845年に『ブロードウェイ・マガジン』（*Broadway Magazine*）12月号に掲載されたときから「四獣一体－人間麒麟」（“Four Beasts in One -The Homo-Cameleopard”）に変更された。この題名の変更がエゼキエル書との関連を明確にしたのである。しかし，まずは具体的に歴史的資料と作品を比較・検証してみたい。

１．「エゼキエル書」の「ゴグ」とアンティオコス４世

さて短篇小説「四獣一体」はこのように始まっている。

> アンティオコス・エピファネスは一般的に預言者エゼキエルの言うゴグ（Gog）と見なされている。しかし正しくは，この名誉はキュロス（Cyrus）の息子カンビュセス（Cambyses）に帰せされるべきである。（119–120）[2)]

ここに言及されている「預言者エゼキエルの言うゴグ」とは「エゼキエル書」第38章，第39章に登場する，神ヤハウェに導かれてイスラエルの地を攻撃・略奪する怖しいメシェクとトバルの支配者である。エゼキエルは新バビロニアにイスラエル[3)]の南王国（ユダ王国）が滅ぼされ，ソロモンの建設した神殿が破壊された前597/6年，ユダヤ人がバビロニアに捕囚となって移住させられた時代のユダヤの祭司／預言者である。彼は，エルサレムの陥落とイスラエル王国（北王国）破滅の理由を，イスラエル人の神ヤハウェからの離反と異教崇拝の罪に帰し，その結果バビロン捕囚という罰を受けたとして，彼らを痛烈に批判する。「エゼキエル書」の「ゴグ」はイスラエルの民に下された罰の生ける象徴と解することができる。

> ゴグがイスラエルの地を襲う日，まさにその日に，と主なる神は言われる。わたしの憤りは激しく燃え上がる。わたしは熱情と怒りの火をもって語る。必ずその日に，イスラエルの地には大地震が起こる。海の魚，空の鳥，野の獣，地の上を這うすべてのもの，および地上のすべての人間は，わたしの前に震える。山々は裂け，崖は崩れ，すべての城壁は地に倒れる。わたしはすべての山の上で，ゴグに向かって剣を呼び寄せる，と主なる神は言われる。人はおのおの，剣をその兄弟に向ける。わたしは疫病と流血によって彼を裁く。わたしは彼とその軍勢，また，彼と共にいる多くの民の上に，大雨と雹と火と硫黄を注ぐ。わたしは自らの偉大さと聖とを多くの国々の前に示す。そのとき，彼らはわたしが主であることを知るようになる。(エゼキエル書，38：18–23)[4)]

神ヤハウェはゴグに命じてイスラエルを攻撃させた後に，最後にゴグの手の弓と矢を叩き落してイスラエルを救ってはいるが，その前に大地に大地震を起こし，火や硫黄を降らせるなど，終末的論な災害がもたらしてい

る。また，最後に打ち倒したゴグの軍勢に対して，ヤハウェは野の獣や猛禽に命じ，彼らの肉を喰らい，血を飲み「飽きるまで脂肪を食べ，酔うまで血を飲」（39：19）むようにさせるなど，この世ならぬ恐怖とグロテスクな地獄図が展開している。聖書学的に見て，エゼキエル書第38及び第39章は聖書の黙示文学の先駆けとなっている。

このように，ポーは冒頭にエゼキエル書の「ゴグ」を引き合いに出すことによって，「エピマネス／四獣一体」の背景を一気に毒々しい極彩色に塗りつぶそうとする。しかし一方，「ゴグ」はアンティオコス 4 世なのか，それともカンビュセス 2 世なのか，という疑問に対しては解釈が読者の判断にゆだねられている。詳細な注をつけてポーの作品を編纂した，マボット（Thomas Ollive Mabbott）が，この作品のアンティオコス 4 世の人物造形に貢献したと考えるランプリエールの『古典事典』（John Lemprière, *Classical Dictionary*，1809）は，カンビュセス 2 世（Cambyses II，在位前530–前522）について次のように説明する。

> キュロス大王の息子でペルシア王。エジプトを征服し，エジプト人の迷信に憤慨し彼らの神［聖牛］アピス（Apis）を殺し，彼らの神殿を略奪する。都市ペルシウム（Pelusium）を征服しようとしたときには，彼の軍隊の兵士の頭に猫や犬を載せて戦わせた。エジプト人は彼らが神格化する動物を殺すことを拒み，むしろ敗北を選ぶことを知っていたからである。カンビュセスはその後 5 万の兵を送ってジュピター神殿を破壊し，さらにアフリカ北部のカルタゴやエチオピアを攻撃した。彼は弟のスメルディスをただの邪推から殺し，えこひいきをした裁判官を罰して生きたまま生皮を剥ぎ，その皮を椅子に釘付けにして，その息子を後任に任命し，椅子に坐るたびにそれを思い出すように命じた。彼は馬に乗る際に自ら短剣で傷つけた傷で落命する。エジプト人は，そこは彼がアピス神を殺した場所であり，神々の手によ

って彼は命を落としたと見なした[5)]。

アケメネス朝ペルシア創始者のキュロス大王（Cyrus the Great，在位前559–前530）は新バビロニアを征服し，捕囚となっていたイスラエル人を解放し，さらに新バビロニアのネブカドネツァル２世（Nebuchadnezzar，在位前605–前562）によって略奪・破壊されたエルサレムの神殿の祭具・宝物を返し，彼らに資金を与えて神殿の再建を許しており，イスラエル人にとってはむしろ恩人のような存在である。だが，聖書では「主はかつてエレミヤの口によって約束されたことを成就するため，ペルシアの王キュロスの心を動かされた。」（エズラ記，１：１）とユダヤ教に都合よく書かれており，謝意はない。

息子のカンビュセス２世については，『古典事典』は異教の神を汚して罰を受けた，狂気の王と解説しているが，聖書ではイスラエル人に危害を及ぼさなかったせいかほとんど言及されていない。『古典事典』の解説の多くはヘロドトスの『歴史』に基づいている。実際カンビュセス２世の業績は，前525年にエジプトを征服し，エジプト第27代王朝を開き，父キュロス大王に継いで国土を拡大したことにあり，「その狂気と異常性が強調されているわりには，実は非常に優秀な支配者だったのではないだろうか」[6)]という解釈も有力である。

しかしヘロドトスの説明は，主にエジプト側からの歪められた伝承の影響が強く，彼を極度に自制心を失った狂気の王として描き出す。たとえば，カンビュセスのエジプト侵攻はエジプト王アマシス（Amasis II，在位前570–前526）に娘を要求したところ，代わりに先王の娘ニテティス（Nitetis）が送り届けられたことに立腹したことによるという。エジプトに侵入するとアマシスはすでに他界していたが，ミイラとなった遺体を墓から出して侮辱を加えた後，エジプト人にとって最高の恥辱である火による焼却処分にしたのである。カンビュセスはエジプト人の崇拝する聖牛アピス（Apis

bull）を自ら短剣で殺したために発狂したという。その結果実弟を殺害させ，結婚していた実妹を些細なことで殺してしまう。また忠臣から意に沿わぬ民衆の意見を聞き，自分の正しさを証明するために自らその息子の胸をめがけて矢を放ち，正確に心臓に命中しているか調べるために胸を切り裂いて心臓を調べさせたりした。そして神の祟りにあったかのように，カンビュセスは些細な傷がもとで聖牛を殺した場所で死んだのだとされる。（『歴史』３巻１–35）[7]

マボットがその英訳をポーが読んでいたことを示唆する[8]，ヘロドトスの『歴史』は，現代人から見ればとても事実とも思えない逸話に満ち溢れているが，その中でもカンビュセスの項目は際立っている。しかしこのように残虐な異説に飾られたカンビュセスに対して，ポーは，アンティオコス４世はさらにその上を行く，とてつもなく異形の王であったと冒頭の文に続けて強調する。

> 実際，シリア王の性格は人目を引くいかなる文飾などはまったく不要であった。（120）。

しかしこの記述を検討する前に，聖書の「マカバイ記」を取り上げて，イスラエル人から見たアンティオコス４世の残酷さを検討してみよう。

２．「マカバイ記」とアンティオコス４世

カトリックの聖書では収録されている「マカバイ記１，２」（“The First Book of Maccabees,”“The Second Book of Maccabees”）には，アンティオコス４世がエルサレム神殿にゼウス像を建て，ユダヤ教祭儀を禁止してユダヤのヘレニズム化を強行したことをきっかけに，ユダヤ・ハスモン家

のユダ・マカバイ（Judas Maccabaeus）の指導の下にユダヤ人がシリア王アンティオコス 4 世に対して起こした反乱「マカベア戦争」（Maccabean revolt）が詳しく語られている。マカベア戦争のほとんど唯一の資料とされる「マカバイ記」は第 4 巻まであり，カトリックでは第 2 巻までが正典（第 2 正典）とされ，東方正教会では第 4 巻すべてが正典であるのに対して，プロテスタントではすべてが経外書として扱われ聖書には収録されなかった。4 巻はそれぞれ歴史性や文学性などに統一性がなく，著者も異なると考えられていて，第 1 巻と第 2 巻の両方でアンティオコス 4 世がほとんどダブって扱われている。ヨセフスの『ユダヤ古代誌』のマカベア戦争に関する記述は「マカバイ記」の影響をかなり受けて書かれている。

アンティオコス・エピファネスはイスラエルを弾圧した結果反乱を誘発したので，マカバイ記の作者は彼の反ユダヤ性を厳しく弾劾している。そして彼が悪の張本人であるだけでなく，彼に擦り寄って権力を得たり，利益を得ようとするイスラエルの不信心者を批判している。

> そしてついには彼ら ［アレキサンダー大王の武将たち］ の中から悪の元凶，アンティオコス・エピファネスが現れた。彼はアンティオコス王の王子でローマに人質として送られていたが，ギリシア人の王朝の第137年に王として即位した。この間，イスラエルには律法に背く者どもが現れ，「周囲の異邦人と手を結ぼう。彼らと関係を絶ってから万事につけ悪いことばかりだから」と，多くの者に説いて回っていた。人々の目にはこれは得策だと映ったので，民の中のある者たちは進んで王のもとに出かけて行き，異邦人の慣習を採用する許可を受けた。こうして彼らは異邦人の流儀に従ってエルサレムに練成場を建て，割礼の跡を消し，聖なる契約を離れ，異邦人と軛を共にし，悪にその身を引き渡した。（マカバイ記第 1 巻，1：10–15）

これを読むとアンティオコスがエルサレムに到来する前にイスラエルに住む人々の多くが王のもとに行き，異教の習慣を取り込み，ユダヤ教徒の証である割礼を捨て，神との契約から離れていった様子が分かるのである。しかし，アンティオコスは大軍を率いてエジプトに遠征中に誤って戦死したと伝えられ，エルサレムで彼に失脚させられたヤソンという前大祭司が大祭司に返り咲き武力でエルサレムを制圧したと聞き，遠征を中断して急遽エルサレムに進軍した[9)]。エルサレムに入った後，「アンティオコスは不遜にも聖所に入り込み，金の祭壇，燭台とその付属品一切，供えのパンの机，ぶどう酒の捧げ物用の壷と杯，金の香炉，垂れ幕，冠を奪い，神殿の正面を飾る金の装飾をすべてはぎ取った。更に金や銀や貴重な祭具類，隠されていた宝をも見つけ出して奪い取った。そしてすべてを略奪すると故国に帰った。彼は人々を殺戮し，高言を吐き続けていた。」（同書，１：21–24）

二年後に再来したときは最初こそ穏やかな調子であったが，「彼は突如としてこの都を襲い，破壊をほしいままにし，多くのイスラエル人を殺した」。略奪をした上で都に火を放ち，家々や都を囲む城壁を破壊し，女，子供を捕え，家畜も奪った。さらにこの町の中に幾つもの堅固な塔を備えた巨大で強固な城壁を巡らして，要塞を築き，そこに罪深い異邦人と律法に背く者どもを配置し，要塞内での勢力を強めて，武器や糧食を蓄え，エルサレムで奪った戦利品を集めて積み上げたのである。（同書，１：29–35）

アンティオコスは領内全域に，すべての人々が一つの民族になるようにそれぞれの慣習を捨てるように勅令を発した。他の地域同様に，イスラエルの多くの者たちが，進んで王の宗教を受け入れた。王はさらに町ごとに勅書を送り，他国人の慣習に従い，聖所での焼き尽くす捧げ物，いけにえ，ぶどう酒の捧げ物を中止し，安息日や祝祭日を犯し，聖所と聖なる人々を汚し，異教の祭壇・像を造り，豚や不浄な動物をいけにえとして献げ，息子たちは無割礼のままにしておき，あらゆる不浄で身を汚し，律法を忘れ，

掟をすべて忘れることを命じ，命令に従わない者は死刑に処せられることになったのである。(同書，１：41–50)。これは要するに，ユダヤ教の伝統を守るイスラエルの人々にとって，彼らのアイデンティティを放棄することに等しい仕打ちだったいえる。

ヨセフスの『ユダヤ古代誌』の記述もアンティオコスの神殿略奪が第１回のときではなく，２回目の到来のときであったことを除きほとんど同じであるが，王の命令に従う人が多い中，ユダヤ人の中には不服従を貫いて虐待と拷問に苦しめられて死んだ高貴な心の持ち主もいたことを紹介している。「事実，彼らはその体を鞭打たれ，切りきざまれ，息のあるうちに十字架にかけられた。他方，彼らの妻や，王の命令を無視して割礼を施された子供たちはしめ殺され，十字架にかけられた親たちの首もとからつるされた。」[10]という。

このように聖書の記述だけで十分に残酷な出来事が描写されているのだが，これらの出来事はこの作品の冒頭に簡潔で抽象的に表現された，アンティオコス・エピファネスの極悪非道の振る舞いの歴史的背景として，作品を支える役割を果たしている。これらの歴史的記述を踏まえて，ポーは真偽織り交ぜながら，悪魔的異教性のヴェールに包まれたアンティオコス４世の人物造形を繰り広げる。

> キリスト来臨171年前の彼［アンティオコス４世］の玉座への接近，というかむしろ王位の簒奪。エペソスのダイアナ神殿略奪の試み，度し難い彼のユダヤ人への憎悪，神殿至聖所への冒涜，そして波乱万丈の11年間の治世末期のタバでのみじめな最期はあまりにも華々しい結末であったので同時代の歴史家はそちらの方に目を奪われてしまい，彼の私生活や評判を総括すべき，不敬で，卑劣で，残酷で，愚劣で，気紛れな彼の行跡は目立たなくなってしまった。(120)

ここで「王位の簒奪」(“his usurpation of the sovereignty,” 120) とあるが，父の命により人質としてローマに送られていたアンティオコスが，父の後を継いで臣下に毒殺された兄セレウコス 4 世（Seleucus IV，在位前187–前175）に代わって王位についた経緯は必ずしも簒奪とはいえない[11]。また「エペソスのダイアナ神殿略奪」(“the temple of Diana at Ephesus”)[12]は，晩年のペルシアの町エリュマイス（Elymais）のアルテミス神殿への略奪の失敗から創作したものと考えられる[13]。また「タバ」(Taba) での最期について，ヨセフスはアンティオコスがこの神殿略奪を阻止された後にバビロンに敗走して重い病に倒れ，自分がこのようになったのは「ユダヤ人の神殿を略奪し，その神を侮って彼らに悪事を働いたからだ」と自らの過ちを認めて息を引き取ったとする[14]。一方，これに比べてポーの描写は彼がいかに冒涜的な振る舞いをして反省のかけらもない人物であったかを強調している。続いてこの作品の舞台となっている古代都市アンティオキアが実際にどのような町であったのかについて検討してみよう。

3．古代都市アンティオキア

アンティオキア（Antioch）はセレウコス朝の始祖セレウコス（Seleucus，在位前305–前281）がアレキサンダー大王（Alexander III，在位前336–前323）の死後同じ臣下であったアンティゴノス（Antigonus，前382頃–前301）との戦いを制し，シリア獲得後に建設した 4 都市の一つでセレウコスの父アンティオコス（Antiochus）にちなんで命名され，その後王朝の首都として栄えた古代都市である（**図 1**）。また，パウロが最初に大伝道旅行をし，ペトロが最初の司教と見なされてキリスト教の 4 大司教座教会の一つが置かれ，4 世紀のローマ皇帝コンスタンティヌスの時代にビザンティン文化の中心地として繁栄し，ギリシア系キリスト教の文化遺産をルネッサ

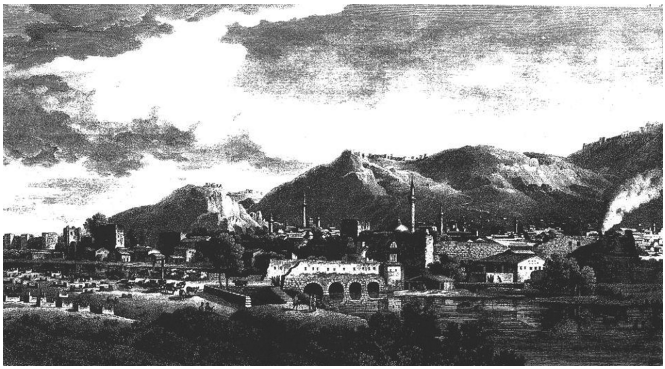

図１　アンティオキア遠望。カッサ画

ンス時代のヨーロッパに伝えた町でもあった。ローマ帝国分裂後イスラム勢力に破壊されてしまい，18，19世紀には完全に遺跡の町となっていたが（**図２**），フランス人の旅行家で画家のルイ・フランソワ・カッサ（Louis-François　Cassas，1756–1827）が1785年頃の自身の旅行に基いて制作した美しい銅版画の出版によって新たな生命が吹き込まれ，同時代の旅行者や学者たちを魅了したとアンティオキアの研究者として名高いG.ダウニーは述べている[15)]。ポーがこの作品の執筆時に，ダウニーが言及しているドイツの文献学者カール・オトフリート・ミュラー（1797–1840）の優れた研究書『アンティオキア古代誌』（1839）を読んでいた可能性は低いが，カッサの銅版画を見て古代アンティオキアのイメージを膨らませていたことは十分にありうることである。

ダウニーはアンティオコス４世の時代にアンティオキアは「市の歴史で最も輝かしい時期を迎えること」になったと述べ，聖書にあるような極悪人のイメージとは異なる面を紹介する。「アンティオコス４世はセレウコス朝の王の中で最も注目すべき人物の一人であったが，活動力，すばやい身のこなし，豊かな想像力を持っていたが，時としては，彼の振舞いは子供じみているようにも見えたし，狂気のようにも思われた。それまでのセ

図 2　アンティオキアの廃墟。カッサ画

レウコス朝の王のうち初代を除けば，彼は最大の建築活動を行なった。その時代のアンティオキアは立派さにおいても贅沢さにおいても，古代の主要な都市のうちでトップクラスのものとなった。」（ダウニー 61）。

セレウコス朝はアンティオコス 4 世の父で「大王」と呼ばれるアンティオコス 3 世（Antiochus III，在位前223–前187）は衰退した王朝を立て直すために東方へ遠征して一時領土を拡張するが，前190年にアナトリアのマグネシアの戦いでローマ帝国と戦って敗れて軍事力を喪失し，ローマに重税を課せられる。次男で後のアンティオコス 4 世が人質にとられたのはそのときであった。父の後を継いだ長男セレウコス 4 世（在位前187–前175）は戦争で被った領土的損失の後始末やローマへの貢税の工面をしなければならなかった。兄に代わって王位についたアンティオコスがこの町で建てた建造物や派手な生活ぶりは，彼が帝国を回復し増強しようと努めた意志の現れであり，セレウコス朝の領土縮小，軍事力の喪失，ローマに対する経済的従属から立ち直るために，国民を政治的・宗教的・文化的紐帯によって団結させようと努め，強力なキャンペーンを繰り広げた結果であった。アンティオコスはギリシアの宗教や支配者の神格化を強化し，属国民ユダヤ人の宗教性に王国分裂の危機をかぎつけそれを防ごうとした。彼が敵対行為や反乱に資金源を提供しそうな神殿の財産を没収したのは帝

国の秩序を守るためであって，単にユダヤ人を嫌い，ユダヤ教の神殿だけを対象としたものではなかった。また，政策にとっての重要性から，それまでのどの王よりも彼は君主の神格化を真剣に考慮し，全国土に神々ゼウス・オリンピオスの崇拝を広げるために，労力と支出を惜しまず注ぎ，この神と自分を同一のものとしたとダウニーは詳述している（ダウニー 61–62）。

またダウニーによれば，アンティオコス自身諸都市に与えた法的恩恵によって，また神々に対して行なった奉納によって名声を得たのである。アンティオキアでは市に対する恩恵の印として新しい市街地を建設し，彼の名前を冠してエピファニアと名づけられた。エピファニアには新しい市場（アゴーラ）が建設され，この町はアリストテレスの主張にそって二つのアゴーラを所有することとなった。一つは「自由なアゴーラ」と呼ばれ，商業活動は禁止され，政治的・教育的活動のためだけに使われた。もう一つは「商品のためのアゴーラ」と呼ばれ，通商に適した場所に置かれるもので古いアゴーラがそれに充てられた。アンティオコスは新しいアゴーラのために天井が金の羽目板で飾られ，壁面も金張りの石版に覆われたユピテル・カピトリヌスの神殿を建立し，有名なローマの建築家を呼び大掛かりな市の水道工事も行なった。

しかしアンティオコスの気前の良さとその富を最も良く示すのは，前167年にダフネで催した競技会であった。ローマ帝国の勝利を祝う将軍の競技会を上回る規模が構想されたのである。使者や使節がギリシア中に遣わされ，祭典に招かれた。必要な資金はアンティオコスのエジプト遠征の際の戦利品，王の知人の寄付，略奪された神殿の財産によってまかなわれた。同時代の歴史家ポリビウスは次のように競技会の壮麗さを記述している。「祭典は次に述べるような行列で始まった。先頭にはローマ風に武装し，鎖帷子の胸当てをつけたハイティーンの若者5000人が立ち，次に5000人のミュシア兵…3000人のキリキア兵の軽騎兵が続き，それぞれ金の冠をかぶ

っていた。」。次に，トラキア兵，ガリア兵，マケドニア兵が続き，それぞれ金や真鍮や銀の楯を持っていた。次に闘剣士や冠と金や銀の馬具を着けた騎兵隊が行進した。しんがりは人も馬も完全に鎖帷子を身に着けた騎兵で，パレードの全員は金の家紋の刺繍などが施された真紅の外衣をまとっていた。その次は6頭の馬が引く戦車100台，4頭の馬の戦車が40台，4頭の象が引く戦車と2頭の象が引く戦車それぞれ一台ずつと装飾用の覆いをかけた象36頭が一列縦隊で続いた。また金の冠をかぶった800人の若者，宗教団体から寄進された1000頭の牛や300頭の子牛が続き，800本の象牙，神々の彫像・英雄像などが金張りを施され刺繍の衣類に包まれて運ばれた。さらに200人の女性が黄金の壷に入った香水を群衆に振りかけながら進み，金の脚をもつ輿に乗った80人の女性や銀の輿に乗った500人の女性がきらびやかに着飾って続いた。競技会，闘剣士のショー，闘牛などが30日間続き，それから5日間は希望者が体育館に招かれて，金の鉢に入れたサフランの香油で体を清めたり，その他シナモン，甘松その他の香料の香油を使うことが許された。そして最高級の料理を盛った1000ものテーブルが用意されて宴会も催されたという。（ダウニー 64–66）

4．グロテスクの美学

さて作中のアンティオコス4世の奇抜な行列については後に述べるとして，再び作品に戻り，アンティオコスの常軌を逸した振舞いを述べた導入部に続く本文を検証してみよう。興味深いのは語り手が読者の一人を連れて，ポーの時代にはすでに廃墟となっていた古代都市アンティオキアに赴き，実際にアンティオコス4世の行列を傍観させる設定になっていることである。つまり，19世紀の現代アメリカの読者を時空を超えて過去の出来事の現場に連れて行くのである。

「親愛なる読者よ」と呼びかけて，「さあ今は3830年の世界で，われわれは最もグロテスクな人間の居住地，驚くべきアンティオキアという町にいるものと想像してみよう」（120）と異空間の旅へと誘っている。これは，同じ初期の作品「ボン・ボン」にパロディ化されている「ファウスト伝説」において悪魔メフィストフェレスがファウストを中世の宮廷や古代神話の世界へと連れて行き，現場を傍観させる場面を連想させる一方，後のポーの作品「鋸山奇談」（“A Tale of the Ragged Mountains,” 1844）で19世紀アメリカの登場人物が，前世の記憶に導かれて前世紀のインドの騒乱の現場に立ち戻る設定にも通じている。

神の天地創造の時間を紀元前4004年10月23日日曜日の前日の日没と定める，17世紀のアイルランドの司教ジェイムズ・アッシャー（James Ussher，1581–1656）のアッシャー年代記（The Ussher Chronology）に従って，作品の背景となる年を3830年（西暦では紀元前175年）と定めてポーが語り始めると，読者は過去へ遡る旅をするのではなく，むしろポーの生きた19世紀を超えて異次元へと旅する気持ちにさせられる仕掛けになっている[16]。3830年という時代設定は，したがってその後ポーの短篇の重要なジャンルの一つとなる，単なる未来小説ではなく現実の時間的・空間的束縛から解放される想像小説としての，SF 的な傾向を巧妙に暗示していたといえる。

また廃墟の町への旅は，ポーが文学の道を歩むきっかけを与えたロマン派詩人バイロン（George Gordon Byron，1788–1824）の代表作『貴公子ハロルドの巡礼』（*Childe Harold's Pilgrimage*，1812）の作者のペルソナ，ハロルドがライン川を下りながら，「主のいなくなった城」（“chiefless castles”）[17]を眺めて，かつてそこに古えの英雄に劣らぬ武勇を誇った盗賊の首領や手下の者どもに想念を巡らせ歌う詩からの影響が想起されるが，ポーの場合は単なるロマン主義的過去の礼賛ではない。「ローマ帝国時代の全盛期には，東方の属国の長官の日常的な拠点であり，姉妹都市の多くの

皇帝たちは…彼らの時間の大半をここ［アンティオキア］で過ごした」（120）のであったが，1833年[18]という年になると壮麗な光景は剥奪されてしまう。つまり「19世紀になるとアンティオキアは，破壊されてみじめな状態になってしまうのである。その頃までにそれは異なる3つの時代において，継続的に起こった3度の地震によって，完全に破壊されてしまうことになる。」（121）。

ポーはこのように廃墟からかつての栄華を想像するだけでなく，それが地震という天災によって継続的かつ徹底的に破滅される未来をも同時に明示して，語りつつある物語の現在の瞬間に対して緊張感を高めている。この地震による崩壊という町の災難を，エゼキエル書のゴグとその軍隊の凄惨な結末や，悪徳のはびこる町ソドムとゴモラに下された旧約の神の裁きと重ね合わせることももちろん出来るだろう。だが，それだけではない。ポーの真の意図は，19世紀初頭の西欧社会からは暗黒と見なされていた中世を突き抜けて古代の世界に舞い降りて，近代人のささやかな知性と感性では及びもつかない，自ら神を自称した東方の古代の王のとてつもない仮装と市民の狂乱の情景に焦点を当てながら，アンティオキアという都市の滅亡を知るがゆえに一層の好奇心と緊張感を高められた現代の読者に，原初のエネルギーに彩られたグロテスクなカオスの瞬間を顕現させることにある。

ポーはグロテスク性を一層強めるためにアンティオキアとは本来関係のないはずの，シリアのエメサ（Emesa，現在の地名はホムス Homs）の太陽神エラガバルス（Elagabalus，作品中は Elah Gabalah）の寺院が紀元前175年に町に設立されていたとして，読者に紹介する。

> あれがシリアでエラ・ガバラという称号で崇められている太陽神の新しい神殿だ。その後悪名高い一人のローマ皇帝がローマで太陽神信仰を制度化しようとし，（ギリシア神話の太陽神ヘリオスと結び付けら

れて）ヘリオガバルスという異名を頂戴することになる。(122)

これは作品の舞台背景となる時代からおよそ400年後に，エラガバルスの祭司でローマ皇帝になったマルクス・アウレリウス・アントニヌス（Marcus Aurelius Antoninus，在位218–222）とアンティオコス４世とを結びつけるための創作的策略である。アントニヌスは，その祖母らの流したカラカラ帝の実子という風説を背景に，時の皇帝マクリヌスを戦闘で破って14歳で皇帝となり，４年後に暗殺された。彼は去勢や人身供儀を伴うエラガバルス太陽神信仰をローマ帝国に広めようとしたとされ，同性愛・異性装・奢侈・淫逸・陰謀・残虐性などありとあらゆる悪徳の風評・伝説に厚く包まれていてまさしくグロテスクの権化とされた人物であり，ポーは風説を利用してアンティオコス４世のグロテスクな像の土台を形成しようとしたのである[19]。

作品中の行列は，先に示したダウニーの解説するアンティオコス４世の豪華で壮麗で平和的な行列の雰囲気とは異なり，最初から哲学者や宮廷人たちが顔に彩色を施し，半裸で棍棒を持ち見物の群衆に向かって叫びながら行進するという異様な雰囲気に満ちたものであった。さらにライオン，トラ，ヒョウなどの猛獣が鎖や綱につながれずに登場する。この時代のアンティオキアでは，獣が兵士を食い殺したり，犠牲の牛を絞め殺すことなど日常茶飯事の出来事だったと語られ，読者の恐怖心がいっそう煽り立てられる。そして国王が登場する前に集まった，市民の興味と好奇心を盛り上げるためにとてつもない企画が伝えられる。

そうだ，間違いなく王は何か新奇なスペクタクルを命じたのだ。たとえば，競技場での剣闘士の実演，スキタイ人捕虜の虐殺か王の新しい宮殿を炎上させること，あるいは美しい寺院を引き倒して破壊すること，または幾人かのユダヤ人を焚殺することなどだ[20]。歓声が高まっ

ている。笑いどよめきが天をつく勢いだ。(123)

市民の興奮は最高潮に達し，語り手と読者は通りや小路を潮のように侵入し溢れる，市民たちの流れに巻き込まれないように安全な場所へ移動しながら，旧約聖書「列王記」にも記されたハマト（Hamath）の民族の信仰するアシマ（Ashima）の神[21]を祀る神殿の前に到着する。列王記には具体的に示されていないアシマ神の姿が，作品において「子羊でも，山羊でも，サテュロスでもなく，アルカディアのパーンでもない」(124）と語り手によって説明され，作中の読者は神像はサル／ヒヒであることを知り驚愕する。ここで言及されている生き物のうち子羊はしばしばキリストの象徴とされ，山羊はユダヤ教の供儀に供されるもので，二つの重要な宗教に関係している。言うまでもなく，サテュルスはギリシア神話に登場する馬の耳と尻尾を持つ森の精でローマ神話のファウヌス（faun）に相当し，パーン（pan）は山羊の角と耳と下半身を有しギリシア神話に登場し，ローマ神話ではシルウァーヌス（Silvanus）に相当する森の精でこれらはいずれも半神半獣なのである。つまりここではユダヤ・キリスト教の神でもなく，またギリシア・ローマ神話の神でもない異教の神が崇められていることが示されている。

しかしシリア王が登場する前に，「彼自らの手で，鎖につながれた千人ものイスラエル人の捕虜を殺した」と市民に告げられて「その偉業が乞食の少年によって天まで届かんばかりに賞賛される」(124）のである。紀元前の神殿ユダヤ教では供儀として日々子羊や山羊・牛などが犠牲として捧げられたのだが，逆にここでは人間が獣神のために犠牲として捧げられたことになる。人間中心の信仰から獣中心の信仰への価値観の転換が描かれている。そしてこの少年と同様にぼろをまとった人々の一団が隊列を組み王を賛美して歌いながら行進する。

1,000人，1,000人，1,000人
1,000人，1,000人，1,000人
われら，一人の戦士によって，殺戮したり。
1,000人，1,000人，1,000人，1,000人
繰り返し，1,000人と歌いたまえ！
そーれ！歌い上げようではないか
我らの王に長き命あらんことを，
王は1,000人以上をかくも見事に倒された
そーれ！皆で叫ぼうではないか！
王はわれらに与えたもうた
何ガロンもの赤い血糊を！
それはシリア全土が産する赤ワインの量をしのぐほどだ。(125)

異教徒の人間からすれば，血は残酷さ以外の何ものでもないが，ユダヤ・キリスト教の観点からすれば血は犠牲と結びつく。ユダヤ教では神ヤハウェがエジプトのモーセに子羊の血を戸口に塗って災いを避けるように命じて以来，過ぎ越しの祭事に家庭ごとに子羊を屠ることがしきたりとなったし，キリスト教ではキリストが十字架上で流した血によって人間の罪をあがなって以来聖餐式でぶどう酒という象徴としての血を飲むことが信者の務めとなっている。教会に飾られることも多い血を流すキリストの絵画的表現は異教徒を怯ませ，強い懐疑を抱かせる。しかし，ポーの作品にもその影響がうかがえる吸血鬼の起源は，ジャン・マリニーが指摘するように，実は古代ギリシアとユダヤ・キリスト教の伝承の中に見出されるほど，古い時代に根ざしているのである[22)]。ポーはこのようにして大量の血を使って異教的儀式を演出している。

ここでいよいよ行列の主役アンティオコス・エピファネスが鳴り響くト

ランペットの吹奏と共に登場し，観衆の興奮は最高潮に高まるのだが，19世紀アメリカから連れてこられた近代社会の市民たる読者には王の登場も市民の熱狂の意味も分らない。

「王は誰だ，どこにいるのだ。彼が見えない。誰が彼なのか分からないとしか言えない。」
それでは君は盲目に違いない。
「事実そうかもしれない。ぼくの目に映るのは，浮かれ騒ぐ愚者や狂人の群れだけで，奴らは競って巨大なキリン（cameleopard）の前に出てその獣のひずめの接吻を求めている。見ろ！　獣が賤民を蹴り上げた，さらにもう一人，もう一人，もう一人と蹴った。本当に，あの動物の巧みな足技には感嘆するしかないよ。」（125）

この言葉に対して語り手は，賤民と見えたのはアンティオキアの高貴な市民であり，キリンに見えた生き物は毛皮をかぶったアンティオコスその人であることを明らかにする。さらに，獣の皮をかぶる仮装は，アンティオコス・エピマネス，つまり狂王アンティオコス（Antiochus Epimanes/Antiochus the madman）という異名を正当化するだけではなく，むしろ王の権威をより高めるための意匠だと主張する。アンティオコスは巨大なキリンの尻尾を二人の愛妾に高々と掲げ持たせ，「エピファネスの他に王はいるのか／…エピファネス以外にはいない，そうだ，彼しかいない／寺院を引き裂け／太陽をかき消せ！」[23]（126）と自ら歌い始めて，沿道から沸き起こってきた勝利の歌に耳を傾けながら進むと，集まった市民の間から「詩人のプリンス，東方の輝き，宇宙の歓喜そして，驚くべきキリン」“‘Prince of Poets,’ ‘Glory of the East,’ ‘Delight of the Universe,’ and ‘most Remakable of Cameleopards!’ ”（127）などの称号が投げかけられるのであった。

アンティオコス 4 世はキリンの姿で市民の賛美と勝利の歌や歓声を浴びて闘技場に到着した暁には，オリンピック競技会での彼の活躍を先取りして詩人の花冠が授与される手はずになっていた。しかし，彼が痛飲したワインのおかげで飛び出た眼や紫がかった顔の色によって度を越した奇怪な印象を演出してしまい，従順に練り歩いていた猛獣の野生を呼び覚ます結果を招いたのである。語り手は懸念していた事態になったとそばにいた読者に避難するように警告する。

> さあ，この水道橋のアーチの中に身を隠そう。そしてこの騒動の原因をすぐに話そう。私が予想していたことが起こってしまった。人間の頭を持つキリンの奇妙な姿格好が，市内で飼いならされた野生の獣が共有する慎み深さの観念を損ねてしまったのだ。謀反が起こった。そしてそのような時にありがちなように，いかに人間的な努力を重ねても暴徒を抑えることなど出来ないだろう。(127)

すでに何人かの市民は食い殺されてしまったが，猛獣の標的は勿論「人間キリン」なのである。王の臣下の者や尻尾を捧げ持っていた愛人たちもすでに遁走しまった。王はといえば信じられないようなスピードで走り始め，きわどいタイミングで猛獣の爪をかわし競技場の門を潜り抜けて行ったのである。彼が競技場で大歓声を浴びてオリンピックの勝者に与えられる月桂冠が授けられることを確信しつつ，語り手と読者は町を後にする。

この作中の「キリン」の原語“cameleopard”は，マボットが説明しているように本来のスペリングは“camelopard”であるが，しばしば誤って用いられることの多いスペリングであった。camelopard という語はもともと，ラテン語の“camelus”（ラクダ）と“pardalis”（雌ヒョウ）が合成してできたもので，「キリン」という訳語が与えられているが，古典期ラテン語の時代にはアフリカ草原のキリンは実物を見た人がほとんどいない

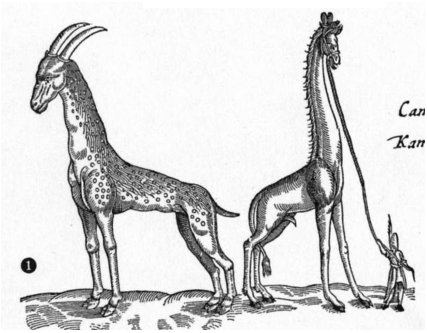

図 3　17世紀のキリンの絵

珍獣であり，中世までその図像表現は，ラクダの足と首を持ちヒョウの斑点模様に覆われた獣というもので，複数の動物を掛け合わせた生き物特有のグロテスクな印象を与えた（**図 3**）。さらに“cameleopard”という語は中央に“leo”つまりラテン語で「ライオン」という語を含んでおり，マボットはポーが意図的にこのスペリングを使い，四獣を「人間」，「ラクダ」，「ライオン」そして「ヒョウ」で表し，それらを合体させて「仮装の人間キリン」（“make-believe man-giraffe”）を示すことになったと解釈する[24]。

1827年頃にエジプトの州知事（Pasha）からフランスとイギリスの国王に一頭ずつキリンが贈られた際，特にフランスでは国王が植物園でキリンを公開した結果市民が殺到しキリン柄などが大流行した事実を紹介し，マボットは，ポーがキリンと国王の結びつきから古代シリア王の奇行にキリンの仮装を巧みに絡ませたと賞賛する。その結果「最高のグロテスク物語の傑作の一つ」（118）が出来たと述べている。こうした考えは，ポーの作品執筆のヒントをそれに影響を及ぼしたと思われる同時代の出来事・流行した文化現象・新聞の記事・書籍などに求める，マボットのポー解釈に共通する傾向を示すものである。

こうした実証的研究はポー研究に限らず必要なことであるが，しかしこの作品のタイトルが“Epimanes”から“Four Beasts in One”に変更され

図４　イタリア・パルマ大聖堂の扉口上の彫刻

た事実をエゼキエル書との関連で考察すると，新たにキリスト教的解釈が浮かび上がってくる。キリスト教で「４つの生き物」（four creatures）といえば，新約聖書の「ヨハネの黙示録」でヨハネが見た幻に登場する生き物で，中世の聖書の写本や教会の壁画・彫刻などに描かれている。黙示録によれば，神の座す天の玉座の中央と周囲に４つの生き物がいて，それぞれ獅子，若い雄牛，人間，鷲のようであったと記されている（ヨハネの黙示録４：７）（**図４**）。

図４のように，教会扉口上を飾るタンパンなどでは「荘厳のキリスト（マイエスタス・ドミニ）の周囲を取り囲む有翼の生き物として描かれ，他方，４人の福音書記者にも充てられて，人はマタイ，獅子はマルコ，雄牛はルカ，鷲はヨハネの象徴像と見なされた。しかしこれら４つの生き物の起源は旧約聖書の「エゼキエル書」に求められなければならない。エゼキエル書の冒頭で，捕囚としてバビロニアに移住させられていたエゼキエルに，天が開かれ，「神の顕現に接した」（エゼキエル書，１：１）際に４つの生き物を見たのである。

わたしが見ていると，北の方から激しい風が大いなる雲を巻き起こし，火を発し，周囲に光を放ちながら吹いてくるではないか。その中，つまりその火の中には，琥珀金の輝きのようなものがあった。またその中には，四つの生き物の姿があった。その有様はこうであった。彼らは人間のようなものであった。それぞれが四つの顔を持ち，四つの翼を持っていた。脚はまっすぐで，足の裏は子牛の足の裏に似ており，磨いた青銅が輝くように光を放っていた。また，翼の下には四つの方向に人間の手があった。四つとも，それぞれの顔と翼を持っていた。翼は互いに触れ合っていた。それらは移動するとき向きを変えず，それぞれ顔の向いている方向に進んだ。その顔は人間の顔のようであり，四つとも右に獅子の顔，左に牛の顔，そして四つとも後ろには鷲の顔を持っていた。顔はそのようになっていた。翼は上に向かって広げられ，二つは互いに触れ合い，ほかの二つは体を覆っていた。（エゼキエル書，１：４-11）

これを読むと，４つの生き物は皆同じ姿で，それぞれ４つの顔をもち，前は人間のような顔，右に獅子の顔，左に牛の顔，後ろに鷲の顔を持っていたことが分かる。すなわち一つの生き物に人間・獅子・牛・鷲の顔があるのだが，ヨハネの黙示録では人・獅子・牛・鷲は翼を持つ異なる４つの生き物に分かれるが，中央のイエス・キリストを四隅から支えることによって４者が再び一つに収束していくのである。

ポーがこの作品の題を「エピマネス（狂王）」から「四獣一体（Four Beasts in One）」に変更したとき，作品のテーマは大きく変わったといえる。つまり，古代シリアのアンティオコス４世という奇想の王の単なる愚行に過ぎなかった物語が，人間の頭とキリン・獅子・ヒョウという三種の動物の性質と外観を持つ獣をテーマとする物語に変貌したのである。この「四つの獣」（four beasts）は聖書の黙示文学の「四つの生き物」（four creatures）

から生じたことはほぼ間違いがない。だが，聖書の四つの生き物が収斂するイエス／神は一体どこにいるのだろうか。イエス・キリストの誕生以前の異教の世界にあっては，四つの獣のうちの一つである人間がその至高の存在になろうとするのは古代では自然な思想であっただろう。かくしてアンティオコス 4 世が自ら名乗る「顕現王（Epiphanes）」は正当化されそうに見えるが，一方，ポーがこの「エピファネス」（顕現王）を使わずに「エピマネス」（狂人）と捩ったことは，人間の神格化を認めずに，狂気によってのみ神を名乗ることができると解釈したことを示していよう。

聖書の「四つの生き物」が神を志向するとすれば，ポーの「四つの獣」の志向する先には獣／人間しかいない。行列に参加した獅子・トラ・ヒョウが人間につき従う「家畜」の外観を投げ捨てて本来の獣性をあらわにしたのは，アンティオコスの「神性」によるためではなく，「人間キリン」の仮装が「人間対獣」や「ラクダ／家畜対ヒョウ／獣」などのカテゴリー性を根底から崩し，人間・自然の秩序を解体して原初のカオスに立ち返らせてしまったからに他ならない。「人間キリン」になりきった王を歓呼で迎える市民の熱狂も同じカオスに発するものだろう。

そういえば，最後に南極の奔流に流される幽霊船に幽閉された主人公を描く「壜の中の手記」（“MS Found in a Bottle,” 1833）も，また北海の大渦／カオスに飲み込まれそうになる体験を描く「メエルシュトレエムに呑まれて」（“A Descent into the Maelstrom,” 1841）も結局はカオスに飲み込まれる恐怖を描いたものである。「エピマネス／四獣一体」のカオスは物理的なカオスではないが，近代人の心理的カオスであり，恐怖であることに変わりはない。この作品は，迫りくる恐怖（カオス／崩壊）の終末の宿命も知らずに，獣神を演じる王のグロテスクな狂態と，そしてそれと一体化したアンティオキアの市民の狂乱の瞬間を，そのおよそ 2 千年後に廃墟の中からポー自ら発掘し再現したものといえるだろう。

イタリア語の“grotta”（「地下墓所」，「洞穴」）に由来する「グロテス

ク」“grotesque”という語は，美術史的に言えば，15世紀に発掘・発見された，ローマ皇帝ネロが作らせ中断した宮殿の過剰な装飾様式を指している。ポーの発掘と再現は「グロテスク」の発見の歴史をなぞる正統的なものだったのである。

語り手は読者を連れて古代アンティオキア（ここでは「エピダフネ」と呼ぶ）を遠望しながらこう話す。

> しかしエピダフネの外観は，「グロテスク」と呼ぶにふさわしいとは思わないかね。(122)

「エピマネス／四獣一体」という作品はポーが「グロテスク」という語を小説に使った最も早い例の一つであった。つまり，この作品はポーのグロテスク宣言の書と解することが出来るのである。

註

☆本論では，古代の人名，地名，書名等は原則として原語表記ではなく，ラテン語及びラテン語系英語名に統一している。

1）ポーは「エピマネス」の原稿を同封した1833年５月４日付の手紙の中で，*New England Magazine* の編集者 Joseph T. Buckingham と Edwin Buckingham に対して，この作品が ’Eleven Tales of the Arabesque’ という短篇集の一つであり，この短篇集は文学クラブの会員11名が自作を朗読し，それを皆で批評する構成になっていると説明し売り込もうとしたが採用されなかった。この短篇集の構想は1831年末以前に出来ており，やがて “The Tales of the Folio Club” の名のもとに集約され，1836年くらいまでポーの手紙などに言及されるが，結局当初の文学クラブの構想は挫折し，16篇まで膨らんだ短篇は，1840年，第１短篇集の *Tales of the Grotesque and Arabesque* に収録・出版された。

2）“Epimanes/ Four Beasts in One” の引用はすべて Thomas Ollive Mabbott 編 *Collected Works of Edgar Allan Poe : Tales and Sketches, 1831–1842* （Cambridge : the Belknap Press of Harvard University Press，1978）による。なお，引用はページ数のみを示す。

3）《「イスラエル」と「ユダヤ」について》 旧約聖書においては，イスラエルは本来始祖アブラハムの孫ヤコブの子と孫に由来する12部族（アシェル，ナフタリ，マナセ，ゼブルン，イサカル，ガド，エフライム，ダン，ルベン，ベニヤミン，

ユダ，シメオン）と祭司職のレビ家を指す総称であった。前926年イスラエル統一王国は北王国と南王国に分裂する。北王国は，エルサレムに神殿を築きそこを首都としたダビデ，ソロモンと続くユダ族／ダビデ王朝の支配に反旗を翻した，ユダ，シメオンを除く10部族からなり，イスラエル王国とも呼ばれるが，前722年頃アッシリアに征服され国外に強制移住させられて民族的アイデンティティを失う。南王国も前598年頃新バビロニアに征服され強制移住させられるが（バビロン捕囚），新バビロニアを征服したペルシア王キュロスに解放されて前538年頃からエルサレムに帰還し神殿を再建して民族的な再出発を果たす。再建した民族的主体はユダ族であるがバビロン捕囚期にパレスティナに定住した他民族も統合して「ユダヤ人」と呼ばれるようになった。「イスラエル（人）」は民族的総称として聖書でも使われ続けたが，「ヘブライ人」は他民族による世俗的な民族名である。（本論の年表は山我哲雄著『聖書時代史・旧約篇』による）。

4）本論の聖書の引用はすべて『聖書 新共同訳―旧約聖書続編つき』（日本聖書協会，2006年）を用いた。「マカバイ記」の引用もここから引いている。

5）F. A. Wright, ed. *Lemprière's Classical Dictionary of Proper Names Mentioned in Ancient Authors*（1788；London：Routledge & Kegan Paul，1879），p. 122.

6）小川英雄／山本由美子著『世界の歴史』第４巻（中央公論社，1997年），pp. 129–30。

7）ヘロドトス　松平千秋訳『歴史（上）』（岩波書店，1971年），pp. 323–352。

8）Mabbott, p. 129.

9）山我哲雄『聖書時代史　旧約篇』（岩波書店，2003年），pp. 238–39。

10）フラウィウス・ヨセフス　秦剛平訳『ユダヤ古代誌４』（ちくま学芸文庫，2000年），p. 78.

11）松原國師『西洋古典学事典』（京都大学学術出版会，2010年）の「セレウコス４世」の項目による（p. 704）。

12）Mabbott, p. 120.

13）ヨセフス，pp. 102–103，マボット，p. 129.

14）ヨセフス，p. 103.

15）G. ダウニー　小川英雄訳『地中海都市の興亡―アンティオキア千年の歴史』（Granville Downey, *Ancient Antioch* Princeton UP，1960）（新潮社，1986年），p. 13. 以下の引用も同書による。マボットもダウニーによる本書を推奨している（p. 129）。

16）James　Ussher はイギリス系アイルランド人としてダブリンに生まれ，13歳でダブリン大学に入学，ダブリンの聖パトリック大聖堂のチャンセラー，ダブリン大学の副学長などを歴任した後アイルランドの大主教（primate）を務めた，17世紀英蘭の激動期を生き抜いた神学者。キリスト教の教義の起源を探究する主著 the *Annales veteris testamenti, a prima mundi origine deducti*（"Annals of the Old Testament, deduced from the first origins of the world", 1650）と *Annalium pars postierior*

（1654）において発表された「アッシャー年代記」には，真実を求める彼の思いが籠められている。（Cf. Wikipedia, “James Ussher”, http : //en.wikipedia.org/wiki/James_Ussher）。なお，ハーヴァード大学教授 Stephen Jay Gould のアッシャーの研究論文，“Fall in the House of Ussher”（*Natural History 100*（November 1991）：12：21）は，アッシャー年代記とポーの関係を暗示している。また紀元前175年をアッシャー年代記で正確に言うと3829年となる。

17）George Gordon Byron, *Childe Harold's Pilgrimage*（1812）の Canto III，46より。引用は *Lord Byron: Major Works,* ed. Jerome J. McGann（Oxford UP, 1986），p. 117。

18）この作品中の現在は，1833年と原稿に記されて以降，作品が発表されるたびに，1836年，1839年，1845年と変化している。

19）『西洋古典学事典』の「エラガバルス」の項目参照（p. 333）。

20）アンティオコス 4 世による「ユダヤ人の焚殺」や後で引用する「ユダヤ人の虐殺」などは歴史的事実とは言いがたく，むしろポーはローマ帝国によるキリスト教徒の迫害・虐殺を無意図的あるいは意図的にユダヤ教徒にすり替えているように思われる。

21）注 3）に記したように，前722年頃イスラエルの北王国はアッシリアに征服されアッシリアに強制移住させられ，その後「アッシリアの王はバビロン，クト，アワ，ハマト（Hamath），セファルワイムの人々を連れてきて，イスラエルの人々に代えて［北王国の一部］サマリアの住民とした」（列王記下17：24）。そしてこれらの民族はそこでそれぞれの神を造り，ハマトの人々はアシマ（Ashima）の神を造り奉ったという（列王記下17：29–30）。しかし，列王記にはアシマが何の姿をしているか書かれておらず，ヒヒとしたのはポーの創作である。

22）ジャン・マリニー　池上俊一訳『吸血鬼伝説』（創元社，1994年），p. 18。

23）この「寺院を引き裂け／太陽をかき消せ」（“So tear down the temples,/ And put down the sun!”）にはイエス・キリストの最後の場面のエコーがある。

　エルサレムに入城したイエスは弟子たちに神殿を指して，「はっきり言っておく。一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない。（“verily I say unto you, There shall not be left here one stone upon another, that shall not be thrown down.”［英訳聖書の引用はすべて欽定訳 King James Version による］）」（マタイによる福音書24：２）と述べ，最後の審判のときに地上のすべてのものと同様に神殿が崩壊することを伝えている。

　またイエスが十字架で息を引き取るとき，「既に昼の12時ごろであった。全地は暗くなり，それが三時まで続いた。太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。（“And it was about the sixth hour, and there was a darkness over all the earth until the ninth hour. And the sun was darkened, and the veil of the temple was rent in the midst.”）」（ルカによる福音書23：44–45）と描写されている。

24）Mabbott，p. 129.

図版出典

図１と２　以下の図書より写真コピーした。Cassas, Louis François. *Voyage pittoresque de la Syrie, de la Phénicie, de la Palestine, et de la basse Égypte.* A Paris : Imprimerie de la République, An VII［ca 1799］．なお，複写を許可して下さった東京大学付属図書館には感謝申し上げます。

図３　荒俣宏『世界大博物図鑑』第５巻「キリン」（平凡社，1988年），p. 314。
原画はイギリスの著述家エドワード・トプセルの『四足獣の歴史』（1607）より。トプセルは科学的記述に俗説も加えている。

図４　筆者の写真。